

センター活動の広がり

南山大学名誉教授 グラバア 俊子

「個性ある生き方と、人間性豊かな社会をつくり出すために……」を掲げ、大学という枠を超え、社会人にも門戸を広げ、研究と共に地域への貢献を目指してきたが、その活動は、1999年に海外へと範囲を広げることとなった。

国際医療センターより、JICAの行っている母子保健プロジェクトへの人間関係トレーニングの専門家の派遣の依頼があったのである。当時JICAでは、母子保健センターを設立し、医師・看護師・栄養学・公衆衛生学などの専門家を派遣して医療技術指導を行い、現地で活動を継続していく人材の育成に努めていた。そして次の段階として、センターを中心に全国の母子保健に関わる人にその学びを発信していくための教育方法と、実際の医療現場で、患者中心の医療の実現のための人間関係トレーニングが求められたのである。

母子保健プロジェクトが実施された国は出産時の母子死亡率が高いが、貧困のみならず、その根底には女性の社会的地位の低さという問題がある。しかし、その状況は文化的・歴史的・宗教的背景が複雑に絡み合っており、その改善は一筋縄ではゆかない。しかし、JICAの出産時の母子の安全を図るという具体的なアプローチは、周産期の女性を心身丸ごと大切にする方法を提案することであり、現地のニーズに添っており、多くの文化圏で受け入れられやすく実質的に女性の人権尊重に繋がるものであった。

こうした活動は、南山学園の「人間の尊厳のために」というモットーそのものに沿ったものであると考え、依頼を受けることになった。南山短期大学という小さなコミュニティーの中で充分理解を得て派遣が実現したことは、幸運であったと考えている。人間関係研究センターが南山大学に移ってから2004年まで続き、パキスタン・カンボジア・バングラディッシュの3カ国、4人のセンター研究員が10回にわたって派遣された。(各回の詳しい実践内容については、人間関係研究センター紀要『人間関係研究』を参照)

私はパキスタンとカンボジアのプロジェクトに参加し、そこで多くの豊かな経験を得た。教育の冒険として南山短期大学・人間関係科において試行錯誤を重ねて構築してきた、ラボラトリー方式による体験学習であるが、文化の違いを超えて学びを促進する教育方法だという、確かな手応えを得ることができた。また、一個の人間として尊重されることによって、人が自信を持ち自分の足で前に進んでいく姿を見せてもらった。